

1 3 砂糖

## 「検証シート」

品目名	13 砂糖		
目標値等 (現状値・実績値)	<b>望ましい食料消費</b> 国内消費仕向量 (単位:万トン)		<b>生産努力目標</b>
	H 9	H 15	H 22
	266	260	255
	236	226	250
	注: は、加糖調製品を除く。		
	1人・1年当たり純食料(単位:kg)		
	H 9	H 15	H 22
	20.6	20.0	20.0
	加糖調製品を含む砂糖の国内消費仕向量は、消費者の低甘味志向や砂糖に対する誤解等により減少が続いているが、近年は、ほぼ横ばいで推移。一方、一人当たり消費量は 15 年度 20.0kg となり、望ましい消費水準である 20.0kg と同水準となっている。加糖調製品を除く砂糖の国内消費仕向量は当初の望ましい消費水準を下回って推移。		(てん菜) てん菜は、北海道畑作農業における基幹的な輪作作物であり、また、地元の製糖工場で製糖されることから、地域経済上も重要な地位を占めている。このため、価格調整制度の下、需給バランスに見合った計画的な生産を進めているが、気象変動による生産量の増減があるものの優良品種の導入により単収は増加傾向。 (さとうきび) さとうきびは、鹿児島県南西諸島及び沖縄県の農業における基幹作物であり、また、地元の製糖工場で製糖されることから、地域経済上も重要な地位を占めている。近年、農地の利用集積の取組等により収穫面積は増加傾向にあるが、単収は台風等の影響によりばらつきがあるため生産量もばらついて推移。
生産努力目標の実現	(てん菜) 関係者の取組を通じた価格競争力の回復により国内で製造される砂糖の需要		

に向けて取り組むべき課題	<p>拡大</p> <p>土層改良等による安定的な生産 直播栽培等による省力化（労働時間の2割程度の減少） 引き続き作付指標による計画的生産 (さとうきび)</p> <p>関係者の取組を通じた価格競争力の回復により国内で製造される砂糖の需要拡大 担い手の生産規模の拡大 農作業受託組織の活用や機械化一貫体系の導入による省力化（労働時間の6割程度の減少） 優良品種の導入や新たな種苗増殖技術の活用等による収量の1割程度の増加 これらを通じた3割程度の生産コストの低減</p>
これまでの主な取組み	<p>望ましい食料消費</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>消費者の低甘味志向や砂糖の誤解等により国内消費量は減少してきている中で、砂糖需要の維持・増大について、砂糖に対する誤解や砂糖の効用等に関する情報提供を図るための取組（オピニオン・リーダーの育成・強化やシンポジウムの開催等）の促進、加糖調製品との価格競争力の強化を図るための粗糖関税撤廃等による国内産糖の価格引下げ等を実施。</li> </ul> <p>生産努力目標</p> <p>(てん菜・さとうきび)</p> <p>価格競争力の回復により国内で製造される砂糖の需要拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>加糖調製品との価格競争力の強化を図るための粗糖関税撤廃等による国内産糖の価格引下げ等を実施。</li> </ul> <p>(てん菜)</p> <p>土層改良等による安定的生産</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>土地基盤整備の実施により、土層改良や暗きよ排水の整備を促進。</li> </ul> <p>直播栽培等による省力化（労働時間の2割程度の減少）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>直播栽培技術の確立・普及、全自動移植機の導入等を推進。</li> </ul> <p>作付指標による計画的生産</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>価格調整制度の下、需給バランスに見合うよう作付指標による計画的生産を推進。</li> </ul> <p>(さとうきび)</p> <p>担い手の生産規模の拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>担い手の農地利用の集積に関する各種施策により生産規模の拡大を推進。</li> </ul>

農作業受託組織の活用や機械化一貫体系の導入による省力化（労働時間の6割程度の削減）

- ・コントラクター等農作業受託の推進や収穫作業等の機械化を促進。

優良品種の導入や新たな種苗増殖技術の活用等による収量の1割程度の増加

- ・地域の環境に適応した多収性品種の導入や組織培養苗、側枝苗といった新たな種苗増殖の取組みを推進。

#### 施策の検証

##### 望ましい食料消費

- ・一人当たり消費量については、望ましい消費水準を達成。
- ・一方で加糖調製品を除く砂糖の国内消費仕向量については、砂糖需要の増大に向けた取り組みや、生産者・糖業関係者が一体となった国産糖の生産コストの低減を更に進めるものの、消費者の甘味離れ等の傾向を変えるまでには至らず、望ましい消費水準を下回って推移。

##### 生産努力目標

(てん菜・さとうきび)

価格競争力の回復により国内で製造される砂糖の需要拡大

- ・国内価格は低下しているものの、加糖調製品の輸入は減少しておらず国内の総需要量はほぼ横ばいで推移していることから、国産糖の需要拡大につながっていない。

表 - 1 甘味全体の需要量の推移 (単位 : 千トン、 %)

砂糖年度	9年	10年	11年	12年	13年	14年	14/9
砂 糖	2,323 (-2.6)	2,313 (-0.4)	2,300 (-0.6)	2,293 (-0.3)	2,277 (-0.7)	2,296 (+0.8)	27 (-1.2)
異性化糖	740 (+0.4)	760 (+2.7)	763 (+0.4)	741 (-2.9)	761 (+2.7)	771 (+1.3)	+ 31 (+ 4.2)
加糖調製品 (含糖量ペーエス)	241 (-1.2)	248 (+2.9)	255 (+2.8)	262 (+2.7)	255 (-2.7)	278 (+9.0)	+ 37 (+ 15.4)
甘味全体	3,303 (-1.9)	3,321 (+0.5)	3,318 (-0.1)	3,296 (-0.7)	3,293 (-0.1)	3,345 (+1.6)	+ 42 (+ 1.3)
1人当たり(kg)	26.2	26.2	26.2	26.0	25.9	26.2	0

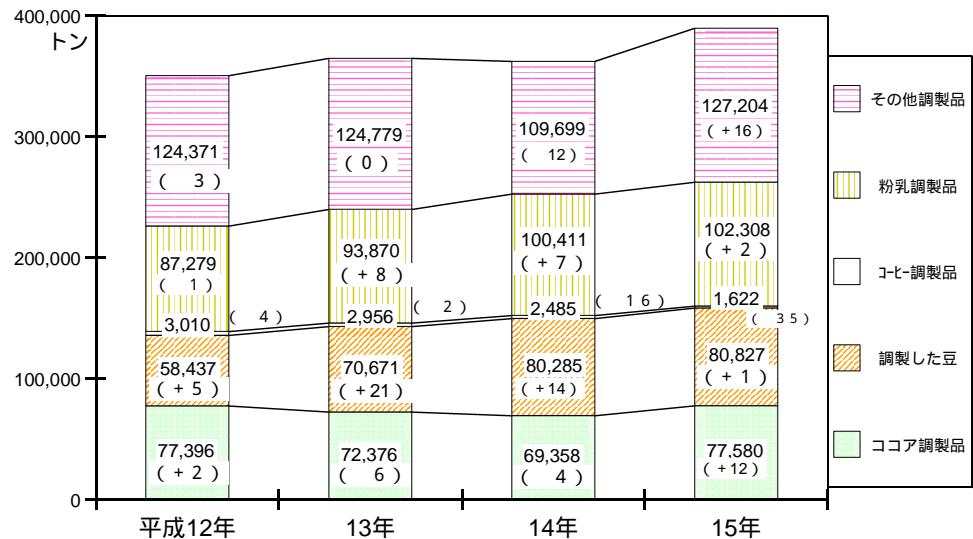
資料：財務省「日本貿易統計」、農林水産省調べ

注：1 ( ) 内は、対前年比である。

2 異性化糖は、生産量を標準異性化糖（果糖 55% ものの固形ペース）に換算したものである。

3 加糖調製品（含糖ペース）は、加糖調製品に含まれる砂糖の量を推計したものである。

図 - 1 加糖調製品の輸入量の推移



資料：財務省「日本貿易統計」

- 注：1 「調製した豆」とは、砂糖に小豆、えんどう豆、いんげんを加えた調製品（主に加糖あん）である。
- 2 「その他の調製品」とは、その多くは砂糖のソルビトール（甘味を有する化学品で原料はでん粉）を混合したもの。
- 3 ( ) 内は、対前年比（%）である。

表 - 2 価格の推移

（単位：円/kg）

年	9	10	11	12	13	14	15
卸売価格	149	144	134	127	121	121	124

注：日本経済新聞の市中相場（東京、上白、大袋30kg入り）の年平均価格である。

### （てん菜）

#### 土層改良等による安定的生産

- ・各整備が促進され、安定的生産を確保。北海道普通畑における整備率（農道が接続し、排水条件が完備しているほ場が対象）は、H9 年度末：60.9 % H13 年度末：68.1 % に拡大。

#### 直播栽培等による省力化（労働時間の2割程度の減少）

- ・直播面積は増加しており（シェア4%）、また、全自動移植機の導入等により移植栽培の省力化を進めたことから労働時間は1割強縮少。
  - ・ 10a当たり労働時間（H22目標：15.70 時間/10a）

H9：18.95 時間/10a

H15：15.98 時間/10a (15.7%減)

表 - 3 てん菜の直播比率と労働時間の推移

(単位：%、時間 / 10a)

年 産	9 年	1 0 年	1 1 年	1 2 年	1 3 年	1 4 年	1 5 年
直播率	3 . 2	3 . 9	3 . 7	3 . 2	3 . 6	4 . 0	4 . 5
労働時間	18.95	18.28	17.56	16.56	16.70	16.43	15.98

資料：「直播率」については、北海道農政部調べ。「労働時間」については、農林水産省「農業経営統計調査（てん菜生産費）」の投下労働時間である。

#### 作付指標による計画的生産

- ・優良品種の導入等多収効果により、単収は増加傾向にあるものの、各年の天候によるところが大きく、15 年産は生育期間を通じて天候上の障害が少なく根部の肥大が順調となったことから、10a 当たり収量が作柄の良かった 14 年産並となった。（H9 : 5,380kg / 10a H15 : 6,130kg / 10a）
- ・また、作付品種については、近年、高糖度・高収量化が進展。品種構成の変化による単収(収量性)の向上(指数(試算))は、H9 : 97.6 H15 : 104.4 に上昇。

#### (さとうきび)

##### 担い手の生産規模の拡大

- ・農家 1 戸当たり収穫面積が増加傾向にあるなど、生産規模は徐々に拡大しており、農家 1 戸当たり収穫面積は、H9 : 0.69ha/戸 H15 : 0.82ha/戸。

##### 農作業受託組織の活用や機械化一貫体系の導入による省力化

- ・農作業受託を行っている組織数は、H9:50 組織 H15:189 組織と拡大しているが、地域の実情に即した高性能管理機械の導入の遅れなどから、労働時間は減少傾向にあるものの目標には達していない。

- ・農作業受託を行っている組織数

H9 : 50 組織 H15 : 189 組織

- ・ハーベスター収穫率

H9 : 27.2 % H15 : 44.0 %

- ・10a 当たり労働時間 H9 : 104.27 時間 H15 : 87.43 時間 (16.2%減)

うち 収 穫 54.65 時間 41.37 時間 (24.3%減)

表 - 4 さとうきびの農作業受託を行っている組織数の推移 (単位:組織)

年 産	9 年	1 0 年	1 1 年	1 2 年	1 3 年	1 4 年	1 5 年
鹿児島県	3 5	4 5	5 9	7 3	1 0 2	1 1 6	1 4 1
沖縄県	1 5	1 5	1 7	2 6	3 4	3 5	4 8
合 計	5 0	6 0	7 6	9 9	1 3 6	1 5 1	1 8 9

資料：鹿児島県・沖縄県調べ

表 - 5 ハーベスタ収穫率の推移 (単位：%)

年 産	9 年	1 0 年	1 1 年	1 2 年	1 3 年	1 4 年	1 5 年
鹿児島県	27.3	32.9	35.1	40.8	44.0	51.0	53.9
沖 縄 県	27.2	30.5	28.9	31.0	31.9	37.2	37.0
合 計	27.2	31.5	31.4	35.0	36.9	42.9	44.0

資料：鹿児島県・沖縄県調べ

優良品種の導入や新たな種苗増殖技術の活用等による収量の1割程度の増加

- ・地域の環境に適応した多収性品種の導入や組織培養苗、側枝苗といった新たな種苗増殖の取組みが進んでいるものの、近年は、台風等の影響から単収は低迷（単収 H9：6,420kg/10a H15：5,810kg/10a）。
- ・作付品種については、地域の環境に適応した品種の導入により収量性の向上に寄与。品種構成の変化による単収（収量性）の向上（指数（試算））は、H9：115.6 H15：122.0 に上昇。
- ・新たな種苗増殖技術の導入については、鹿児島県では組織培養苗、沖縄県では側枝苗による種苗増殖に取り組んでいる（H15 生産実績：組織培養苗 23 万本 側枝苗 307 万本）。

### 3割程度の生産コストの低減

- ・単位面積当たりの生産コストは、労働時間等の減少により、1割強減少しているものの、単位収量当たりの生産コストは、台風等による単収の変動の影響を受け、毎年増減を繰り返しており、結果的に生産コストの減少につながっていない状況。

表 - 6 さとうきびの生産費（副産物価額差引）の推移

(単位：円)

年 産	9 年	1 0 年	1 1 年	1 2 年	1 3 年	1 4 年	1 5 年
10a 当たり	174,433	174,151	173,141	170,380	169,797	162,058	156,376
トン当たり	24,846	21,611	23,413	26,232	24,388	27,607	26,034

資料：農林水産省「農業経営統計調査（さとうきび生産費）」